信毎歌壇

小池 光選

ざっくりと春のキャベツを切りたればなんと見事な断面と知る　（宮田村）小田切孝子

勉強も体育もだめだったおれ短歌を学び老いて役立つ　（長野市）せきたつお

陽だまりに雀集まり何語る老いも聞きたや仲間に入りて　（軽井沢町）藤巻 文枝

かつて亡娘の勤めていたる町役場跡地に今年もさくらほころぶ　（長和町）羽毛田 栄

缶切りもマッチもありし台所いつしか昭和ひっそりと消ゆ　（飯綱町）坂井 寿男

ぼつねんと裏畑にはぐれし仔鹿いて航えいるならむ細き声あぐ　（長野市）近藤 光子

山際の灯りを点すスナックに切々響くママの「舟歌」　（松川村）岡 豊村

梅一輪咲くを見届けひき蛙目覚めし如くに鳴き出でにけり　（小布施町）市村 憲彦

何故に吾を難病に選びしかかくも優しき夫与えしか　（茅野市）五味みさほ

松の木の下に今年も黄水仙何もしなくても勝手に春は　（松本市）堀内 悠子

佳作

城あとの枯れ野の雪に薄日さし福寿草咲くわが里の春　（長野市）窪川 志郎

窓を開けホームで駅弁買っていた各駅停車の昭和の旅路　（松本市）小松 久志

選評

第一首、果物の断面はよく歌になるが、野菜を切ったそれの歌は珍しい。新鮮な春のキャベツ、ざくりと一息に切ったその断面、まことに見事である。第二首、短歌をやってよかった、という歌。皆さんにもきっと励ましになるだろう。老いて役に立つものはそんなにあるわけではない。第三首、楽しそうな雀の会話、わたしも仲間に入りたい。童話の一場面のようで、思わず心和んだ。

小島 なお選

花の雨に打たれるやうにやはらかさやうならをして四月始まる　（長野市）北沢 京子

塀の中の卒業式終へハグも無く女性受刑者は移送されゆく　（飯山市）市村紀久子

冬越しの玉ねぎ芽を出し叫んでる めぐみさんたち未だ帰れず　（長野市）せきたつお

思ひ出を残し消えゆく松本の井上、パルコ、ヨーカドーよさらば　（松本市）中村 博穂

窓越しに蠍座のS字を目になぞりけふ一日をゆるく始むる　（千曲市）中村 美樹

おそらくは終の桜と感じつつ車椅子にて父を連れ出す　（佐久市）中田 恭子

1キロに変えたダンベル手放す日必ずあるもあらずと擦る　（駒ケ根市）小平ひさし

風強く吹く雪の朝「俺がいく」と茶飲んで出かけるプラ当番に　（千曲市）沢 千枝

箱席にばあちゃん三人輪になってみかんも一つ定刻発車　（長野市）堀内 祐希

耕運機オイル交換鼻なでて山の畑で春耕始む　（長野市）山田登志夫

佳作

ああ俺も老人会費免除者かその印付く名簿の届く　（長野市）坂口 智弘

鳥は空魚は水を行くけれど我は地を行くほかに術無し　（飯綱町）坂井 寿男

選評

第一首、3月の別れは4月の出会いへやさしくいざなう。や行の韻律にしなやかな雨と言葉の質感がにじむ。第二首、刑務所の中の卒業式。彼女は何を学び、どんな大人になるのか。この日が大切な日になることを願う。第三首、厳しい季節を乗り越えて声を上げる命の芽。拉致された人々の声は何処へ。第四首、井上百貨店、パルコ、イトーヨーカドー。「さらば」の言葉のさわやかな寂しさ。

米川 千嘉子選

君からの朝日の中の提案は清く明るく白く眩しい　（松本市）堀内 悠子

照れないで「生きてるうちにハグしよう！」七十路の夫が言うからリアル　（長野市）小林 操

言いかけてそれきりになった言の葉が舞い降りてくるしんしん雪夜　（木祖村）佐々木千代子

「天国と地獄」をみればひしひしと役者と共に我ら老いたり　（小諸市）星野 直人

帰省してギターとアンプを置いていく今好きな物と暮らすのだろう　（松本市）川村 聡子

男の孫のピアノコンサート聴きし夜天心にシリウスひたと捉へつ　（長野市）近藤 光子

われ二十歳史先生に選ばれし歌壇の歌を星のごと抱く　（飯山市）小野沢竹次

風呂上がりパンツ姿の卒寿われボクサー気取りてフックを繰り出す　（長野市）青木 武明

百二百園児が吹きしシャボン玉一つ一つに春を持たせて　（木曽町）新村 亮三

見上げたる四月の空より小雪降るカンボジアよりの実習生に　（佐久市）荻原多美子

佳作

「清明」と暦にありて山鳩の声も長閑に宴科の里　（千曲市）上原 博司

宅配で届きし箱は東京の息子夫婦の不要なる物　（佐久市）小泉 英介

選評

第一首、提案はあまりにも理想的に過ぎたのだろうか。それは作者にとっての「君」の感触そのものかも。第二首、人生の残り時間を意識してのハグ。若い頃とも違う切実さだ。第三首、言わないままだった言葉、抑えていた心がとめどなく落ちてくるようで切ない。第四首、1963年の日本映画。三船敏郎や仲代達矢ほか、昭和を代表する役者たちの盛りの若さ。作者自身の若さもそこにある。